

## グラント宣教師夫妻来日の背景 1945

### はじめに

仙台に初めて設立されたプロテスタント教会は、仙台浸礼教会（現在の日本キリスト教団仙台ホサナ教会）です。1880年10月（明治13）のことで、設立場所は二日町の清野供之進宅でした。これはアメリカン・バプテストの宣教師 T.P.ポートの働きによるものです<sup>1</sup>。彼は横浜在住で、東北巡回伝道の途中に仙台に立ち寄り伝道し、教会を設立したのですが、その後バプテストや他の教派の宣教師が次々と来仙し、この地に定住して地に足を付けた活動を開始します。

明治の時期だけに限っても、仙台に定住しキリスト教を伝えるために活動した宣教師の数は、アメリカン・バプテストで26名おり、他教派を含めれば約160名の宣教師たちが、仙台に在住し、教会や学校や地域での働きに献身し、福音の種を蒔く働きを行っていました<sup>2</sup>。そしてその種はやがて芽を出し、成長し、多くの実を实らせましたが、同様のことが日本の各地で起こっていたのです。

時が流れ昭和の時代になると、満州事変（1931年・昭和6）、盧溝橋事件（1937年・昭和12）、真珠湾攻撃（1941年・昭和16）と大きな時局の変化が起こり、宣教師たちはこよなく愛した日本に別れを告げ、誠心誠意主に仕え身を捧げてきた日本から去らざるを得ない状況にだんだんなっていきます。それでもなお日本に留まり使命を果たそうとした宣教師もいましたが、開戦後すぐに敵性外国人として連行・抑留されてしまいます。これにより日本で活動する宣教師は皆無となります。

なお、宣教師はじめ抑留された外国人たちの帰国は、1942~1943年（昭和17~18）に日米間、日英間で計三度行われた「交換船」の実施を待たなければなりませんでした。

### 1. 神道指令と宣教師派遣要請

敗戦後の1945年（昭和20）12月15日に、二つの出来事が起こりました。

一つは日本を占領した連合軍総司令部（GHQ）から、日本政府に対し神道指令が発せられたことです（「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」<sup>3</sup>）。明治維新後、神社神道を皇室神道のもとに再編

成して作られたいわゆる国家神道は、天皇制支配や国家主義、軍国主義と結び付き、その思想的支柱となりました。信教の自由は国民から奪われ、国民総国家神道信者となるよう教育を通して強制されました。このシステムが GHQ の神道指令により解体されます（但しこのシステムを支持し、その有益性を政治的に利用したいと考える勢力は、今日においてもしっかりと生き続けていることを、私たちは忘れてはなりません）。

この日に起こったもう一つの出来事は、GHQ 最高司令官ダグラス・マッカーサーが、アメリカ南部バプテスト教会会議議長宛に手紙を送ったことです<sup>4</sup>。「日本人の精神生活は戦争で空白になっているから、キリスト教を日本人に布教するのは、今が絶好の機会である」と日本宣教を強く促す内容の手紙です。マッカーサーにとっての重大な課題の一つは日本の民主化でした。自らも聖公会の熱心な信徒であるマッカーサーは、民主主義の基盤はキリスト教にあると確信していました。そのためにアメリカの諸教派の教会を激励し、多くの宣教師を日本に派遣させ、彼らに対して GHQ ができる限りの便宜を図り、キリスト教が日本に広く宣教されることを支援したのです。その効果は次第に現れ、日本に派遣された宣教師の数は 1947 年（昭和 22）には 315 名、1948 年（昭和 23）には 707 名、1949 年（昭和 24）には 980 名と増え、1951 年（昭和 26）までに来日した宣教師は、合計 2,500 名に及んだと言われています<sup>5</sup>。

GHQ 最高司令官がキリスト教に対してばかり特別に肩入れし支援することは、信教の自由の観点から問題があるのではないかという声は、内部からも挙がりました。しかしマッカーサーは、特定の宗教や信仰が弾圧されているのでない限り、信教の自由は保たれているのであり、占領軍がキリスト教の布教に対して色々な援助を与えるのは自由だ、との自説を曲げませんでした<sup>6</sup>。

## 2. グラント宣教師夫妻の来日

1950 年（昭和 25）に来日し 2 年間の語学研修を経て仙台に着任（1952 年・昭和 27）、開拓伝道を行い、仙台教会設立（1955 年・昭和 30）を果たしたワース・グラント宣教師夫妻も、マッカーサーの呼びかけに応えた宣教師でした。「パーム・ビーチ・ポスト紙」の 2005 年（平成 17）12 月 21 日のオンライン版には、ワース・グラント師の死亡広告記事<sup>7</sup>が掲載されていますが、その中に次のような一文があります。

Responding to General MacArthur's call for "one thousand missionaries", Rev. Grant sailed with his family to Yokohama in 1950 as part of the largest group of U.S. civilians to return to Japan following World War II.

(1,000 人の宣教師の派遣を求めるマッカーサー総司令官の要請に応じ、グラント師は 1950 年(昭和 25)に家族と共に海路横浜に向かいました。第二次世界大戦後、日本に戻る最も大人数のアメリカ市民の一員としてでした)。

このように歴史を振り返ると、信教の自由に関するマッカーサーのかなり強引な理解の仕方の影響と恩恵が、仙台教会誕生の背景にはあったこととなります。但し、他の宗教を弾圧していない限り、キリスト教を優遇しても信教の自由には反していないという論法は、あまりに手前味噌な解釈で、今日では共感を得ることは難しいでしょう。

国家は強大な力を持ちます。教育を利用し国民を見事に国家神道信者に仕立て上げた実績もあります。国家神道ではなくキリスト教の信者にするのであれば赦されるという問題でも勿論ありません。国家はどのような宗教であれ、それを利用して人心を統一する誘惑に負けて、その絶大な権力を行使してはいけません。それは私たち一人一人が持つ基本的人権を踏みにじることになるからです。

教会は信教の自由をはじめ、人間の基本的人権を踏みにじろうとするいかなる企てに対しても「否」を唱え、その間違いを正し、それに対抗して立ち向かう使命を与えられていることを、私たちは忘れてはならないのです。(文責：小林孝男)

#### コラム

#### 仙台教会歴史シリーズについて

仙台教会の教会組織 70 周年を前に、個人的な関心から仙台教会の歴史を週報や他の資料を用いて振り返り、年表の元となる「原表」を作成する作業を、この二、三年行ってきました。その作業の中で浮かび上がってきた歴史的な事柄や印象に残ったことを、その都度短い文章にまとめたものが「仙台教会歴史シリーズ (No.1~26)」で、いわば原表作成作業の副産物です。

この度、執事会の判断で教会の皆様にご覧いただく機会を得ました。大変光栄ですが、内容的には私の認識不足から不正確な点や間違いも含まれているかもしれません。その際は遠慮なくご指摘いただき、より正確な仙台教会の歴史理解に近づけたらと願っています。よろしくお願いたします。

2024 年 9 月 1 日 小林孝男

---

<sup>1</sup> 大島良雄(2005)『バプテストの東北伝道 1880-1940』ダビデ社、18 頁

<sup>2</sup> 野村俊一編(2014)『デフォレスト館建造物調査報告書』東北学院、47 頁

<sup>3</sup> 資料(1945/12/15\_神道指令)

<sup>4</sup> 孫崎亨(2012)『戦後史の正体 1945—2012』創元社、72~73 頁

<sup>5</sup> 袖井林次郎(1974)『マッカーサーの二千日』中央公論社、221 頁

<sup>6</sup> 同上 222 頁

<sup>7</sup> <https://www.legacy.com/us/obituaries/palmbeachpost/name/worth-grant-obituary?id=26343027> (閲覧日:2022/5/31)